



わたしとことば

師の跡を求めず、 師の求めたるところを求めよ

大蔵流狂言方

山本 やまもと

東次郎 とうじろう

弘法大師のこの言葉に私が巡り逢ったのは、父の死後、二年ほど経った頃だったと思います。父は亡くなった時、六十五歳、私はまだ二十七歳でした。すでに大蔵流の現行曲・二百曲、能の間狂言・百五十曲あまり、なかには四十年、五十年先に演じるものまで、すべての曲の稽古を済ませてくれていて、そのことで慌てることはありませんでした。

しかし、習ったことを正確に覚え、再現するだけでは到底、真の狂言とは言えません。何より大きな悩みだったのは、年齢はもとより私は体格・体質・体力、すべての点で「まるで重戦車のようだ」と評された父とあまりにも異なっていたことです。舞台に立った時の巨大な存在感、どうしたらあのような重厚で迫力ある芸ができるようになるのか、責任をもって父祖伝来の芸を継承していかなければならない立場なのに、自分には逆立ちしてもできっこないと絶望的な気持ちになる苦しい日々でした。

「親父さんの真似をしたって駄目だよ。人間は一人一人違うんだから」、そうおっしゃってください方もおいでになりました。そしてまた、師の真似をしているうちは決して師を超えられないこともわかっていきます。でもいつたいていどうすれば良いのか、そんなふうに思い悩む毎日のなかで巡り逢ったのがこの言葉だったのです。

人間には皆、生まれ持った資質があり個性があり、どのような厳格な稽古を受けても、誰もが同じに演じるようにはなりません。しかし、狂言は六百年もの間、変質することなく生き続けてきました。それは代々の狂言の演者たちが遥か彼方に同じ理想を掲げ、それを追い求めてきたからこそ。狂言を育て、磨き上げてきた時代時代の狂言の演者を貫いて通った究極の一点を私も求めていきたい。

私も父の亡くなった年齢をいつの間にか超えてしまいました。しかし今も変わらず、「師の求めたところを求めて」、狂言を演じ続ける毎日です。



山本 東次郎

大蔵流狂言方。四世山本東次郎則寿。

1937年東京生まれ。

1992年度芸術選奨文部大臣賞、2006年度

日本芸術院賞受賞。1998年紫綬褒章受章。

重要無形文化財総合指定、日本能楽会会員。